

記事「蒲生俊文、人と生涯」

堀 口 良 一

解 説

ここで紹介する資料は、保険六法新聞社編集・発行『週刊保険六法』に掲載された記事「蒲生俊文、人と生涯」（1977年6月17日、607号、5頁）である。この記事は、「蒲生俊文の長男俊仁氏ら関係者の話と、中災防編「日本の安全衛生運動」¹を参考にしてまとめました」と記者が断っているように、長男・俊仁に負うところが少なくない。この点で、同記事の内容は蒲生俊文を身近に知ることができる貴重な資料である。同記事は現在、入手困難であり、かつ学術的な資料価値が高いので、以下に、その全文を掲載する。

凡 例

- ・原文縦書きを横書きに改めた。
- ・「 」、()、【 】、……は、原文で使用されているものである。
- ・〔 〕内およびルビは引用者による。

蒲生俊文、人と生涯²

安全運動のパイオニア 晩年は理解されず³

「わたしのやったことが生かされなかった」……安全運動の先駆者の一人、蒲生俊文は、晩年、病床に伏せりながら、彼の意志を継ぐこと

になった曾我孝典氏（東京芝浦電気、安全保健センター専門主査）の手を取り、こう語ったという。

明治十六年、茨城県⁴に生まれた蒲生は、一生を安全運動に身を呈し、全国安全運動を生み、安全のシンボルである「緑十字」を創った、わが国の安全運動の創始者として忘れることのできない先駆者である。しかし、その晩年は、必ずしも社会的に恵まれず、むしろとんじられた。彼の功績は、多くの安全運動に携わる人々に認められているものの、彼の思想的背景、生涯については、あまりに知られていない部分が多い。

明治十六年、茨城県⁵で裁判官をしていた父蒲生俊孝と母久米子（糸子）との間に、五男五女の長男として俊文が生まれた。両親は厳父慈母という典型的な明治時代の家庭であったが、父が岐阜県高山の酒造の家の出で裁判官、母が藩士の家の出という恵まれた血筋を引いていた。

父俊孝は地方の裁判官で一生を終えたが、不正を許せぬ性格から世故にとり入ろうとしなかったといわれる。こうした環境のなかで俊文は、小学校時代を茨城県の竜ヶ崎で過ごした⁶。中学時代は、一時親戚の家へあずけられたこともあったが、父の転任先き山形へ移った⁷。このとき、東京弁を使う俊文少年はいじめられ、学科もかなり進んで勉強も大変だったが「いなか者に負けてたまるか」とかえって一生懸命に勉学に励んだ。

高校時代は、父の赴任先の仙台にあった二高へ。語学が好きで、独語はトップの成績、ラテン語、英語にも通曉。キリスト教に興味を抱く一方、仏教にも詳しく（実家は浄土真宗）、後に安全運動に生涯をかける思想形成がなされていた。

明治三十六年、俊文二十歳で東京帝国大学へ入学。本人は文学が好

きだったが、法曹会〔^{ママ}界〕にいた父の意向で法学部⁸に学んだ。このころ、休暇に帰省した俊文は、病弱で床についていた母の枕元で「モンテクリスト」の原書を訳しながら読んで聞かせて、なぐさめたという。

大学卒業後、一時大蔵省へ^{ママ}務めたが、役所^{ママ}務めが膚に合わず、民間の東京電気（東芝の前身）に入社。この東京電気庶務課長時代に蒲生俊文が安全運動に生涯をかけることになった事件が起こった。

それは、大正三年、俊文三十一歳、東京電気で感電事故が起きたとの知らせに、蒲生俊文が現場へかけつけると、すでに若い職工が口から泡をふいて死んでいた。「いきなり夫のなき^{ママ}ながらに抱きつき、胸に顔を埋めて泣きくずれてしまった」若い未亡人に「何を尋ねても、ただ声を放って泣くばかり」で、俊文は大きなショックを受けた。折りしも、この事故のあった年の五月は、俊文自身が、妻（^{すみこ}純子）と結婚した年でもあり、宗教的そして文学的な傾向を持った多感な青年の心をとらえるには十分だった。

「すべての労働者のために、かくのごとき不祥事が発生しないための努力が必要である」との思いに、蒲生は、安全運動に身を投じた。工場に安全標示をし、安全通知を配り、社内報を通じて安全上の心得を訴えた。安全委員会をつくって、月一回パトロールを実行した。

ところが、工場内では「目ざわりだ」「能率があがらない」などと批判が続出、果ては「工場内をまわって、アラを拾い、上の方へ報告するのだ」といった邪推が生まれ“アカ”よばわりされる始末。

だが、蒲生は、明治のロマン青年の気質を備えていたという上司の新生〔^{ママ}莊〕吉生（大正八年社長に就任）の「日本一の模範工場にするためなら、いくら金をつかってもよい」という励ましに支えられて多くの非難中傷を乗り越えていった。

そうした折、大阪の住友伸銅所（住友金属工業の前身）で、蒲生と同じように、切断機事故で肉片となって死んだ工員の妻の悲嘆を目撃した三村起一（後に中央労働災害防止協会会長）とめぐりあった蒲生は、東と西で、それぞれ安全運動を推進していくことを誓い合った。大正六年のことである。折りしも、第一次世界大戦のさ中で、好景気の日本には労働災害が多発していた時期であった。

大正八年五月四日、文部省東京教育博物館の「災害防止展覧会」の講演で、蒲生は安全週間を実施しよう、と呼びかけた。アメリカのセントルイス市で行われた安全週間をわが国にも導入しようというものだった。

この蒲生の講演がキッカケで、その月の内、発起人会が開かれ、蒲生の提案で安全運動のシンボルマークを「緑十字」にすることが決まった。六月十五日から一週間、東京市を中心に、わが国はじめての「安全週間」がこうして開かれ、蒲生の努力が結実した。

その「週間」は盛大なものとなり、東京市中が沸き立った。ビラやポスターが、浴場や旅館、交番などにいたるところにはられ、自転車には小旗がはためき、電車もマークをつけて走ったという。

「週間」中に災害も減少した。この運動の成果は、次々に他県、各地に波及。ついに昭和三年、全国的規模で行われる「全国安全週間」の第一回が催されるまでに進展、以来、戦争中も連綿として、「週間」は続いていく。

この間、蒲生俊文は、大正十二年九月一日の関東大震災で、同僚の多くを失ったことにより、東京電気を退社。内務省社会局の嘱託となり、産業福利協会の理事に就任して月刊誌「産業福利」を発刊するなど、安全運動に挺身していった。

「一致協力して怪我や病気を追払ひませう」とのスローガンで行わ

れた第一回の「全国安全週間」は、蒲生の所属する内務省社会局の主張。翌四年八月には、ILO総会に、政府随員として蒲生も出席した。

だが、かつて「安全キチガイ」とまで新聞で評された蒲生の心中には、一つの矛盾が芽生えていった。それは、安全運動が、より拡大していくにつれ、政府の所轄するところとなり、官制的な色彩を帯びてきたことが原因となっていた。蒲生の人道主義的な性格と“官制”的な安全運動との間にギャップが生じていたのである。

第二次世界大戦が近づくと、安全運動も次第に戦争の色相を深め安全週間スローガンは「安全報国銃後の護り」（昭13）、「総力戦だ 努めよ安全」（昭16）と変化し、蒲生も、大日本産業報国会の安全部長となった。安全が国を守るための人的資源を確保するものとしてとらえられる。こうした傾向に、あがら^{ママ}〔らが〕う余地はなかったといえる。

昭和二十年、敗戦を迎えたわが国は、多くの公職追放者を出した。蒲生もその一人であった。

蒲生は、「安全運動に携わっていたのに、なぜ公職追放になったのか」と憤慨、GHQへ抗議しに行った。すると、GHQも、かねて米国に安全運動を視察していた蒲生をよく理解し、公職追放は解けないが「ここへ来てくれないか」ときそった。GHQのコンサルタントとして、しばらく働くことになり、戦後の混乱期の生活は一応安定。

昭和二十二年、労働省が発足し産業安全行政が厚生省から移管して後の昭和二十四年、蒲生は、産業安全研究所の生みの親である伊藤一郎らとともに、第一回目の労働大臣賞を受けた。

しかし、晩年の蒲生は、彼と同様に安全運動の先駆者であった三村起一や伊藤一郎らが、会社の経営者であつたのとは対象^{ママ}〔照〕的に、ほとんど資材に乏しかった。ある時蒲生の側近が「先生は、安全運動

もけっこうだが、生活を考えない運動が利潤を生むようにした方がよい」と進言したところ、「安全で金もうけるなんて、そんなことができるものか」と憤ったといわれている。

生前「安全技術者は増えたけれど、安全哲学をもっている人は育たない」となげいていたともいう。

蒲生の晩年を知るある人は「昔し話が多く、指導力がなくなっていた。戦後は科学的証明のない安全運動ではついて行けなくなっていた」と語る。あまり世間から評価されない晩年の苦しみを味わったようだ。

蒲生は、「家庭安全協会」をつくり、その賛同者を求め運動している最中に、地下鉄の階段で足を踏みはずし、入院した。その二年後の昭和四十一年九月九日、東京神田の三楽病院で長い安全運動にかけた一生を閉じた。死因は老人性肺炎、享年八十三歳。蒲生の妻純子は、八年後、夫と同じ八十三歳、命日も近い九月十日に他界した。

遺族の話によると、生前蒲生は公正な裁判官であったために地方まわりで終わった父にかこつけて「オレはさっぱり出世しなかったが、やましいところはない。いつでも安心しておむかえを受けられる」と話していたという。

【蒲生俊文の長男俊仁氏ら関係者の話と、中災防編「日本の安全衛生運動」を参考にしてまとめました】

注

- 1 中央労働災害防止協会編集・発行『日本の安全衛生運動——五十年の回顧と展望——』1971年、を指す。
- 2 「蒲生俊文、人と生涯」は、記事の主見出しである。
- 3 「安全運動のパイオニア 晩年は理解されず」は、記事の副見出しである。
- 4 茨城県は栃木県の誤り。堀口良一「蒲生俊文の墓誌」『近畿大学法学』第58巻第4号、2011年3月、74頁、注8を参照。

- 5 上記注 4 に同じ。
- 6 蒲生俊文は1892（明治25）年 4 月から1895（明治28）年 3 月まで茨城県龍ヶ崎高等小学校に在籍していた。堀口良一「蒲生俊文の履歴書および辞令」、『近畿大学法学』第58巻第 1 号、102頁および108頁、参照。なお、履歴書では「竜ヶ崎」ではなく、「龍ヶ崎」となっている。
- 7 蒲生俊文は龍ヶ崎高等小学校卒業後、東京市の私立錦城中学校に入学し、1898（明治31）年 9 月に山形県の荘内中学校の 4 学年に転入し、1900（明治33）年 3 月に同校を卒業した。堀口良一「蒲生俊文の履歴書および辞令」、『近畿大学法学』第58巻第 1 号、102-103頁および108頁、参照。
- 8 当時は、法科大学と呼ばれていた。

付記 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究課題「蒲生俊文の伝記的研究——戦前期日本における安全運動の基礎的研究——」（研究代表者・堀口良一、研究課題番号21530575、研究期間2009-2011年度、研究分野・社会学、研究種目・基盤研究(C)）の成果の一部である。